

八  
丈  
山  
水

四

八  
雲  
抄  
卷  
之  
下

乙未年夏月

唐  
書  
畫  
館  
藏

本

空

人  
事

吳  
昌

亨

魚

衣  
食

捨  
比

獸

人  
緣

雜  
物

詩

八  
卷之三下

卷之二



やまももの後抄本  
くのづらあはれ  
かとう木

まよふよやまりすうきをつる源氏のへんとく

みちを絶つて あらそこのうたをよひとく

さんとこちあましいわまくらうとく

ひきよ まつ一木

ゆめの葉ま うと ねうき そ

万よみ作 まことらといあら

ゆめの葉ま かづく まき あくまく かづ

けこ もとそ 梅 万よみえもあくめこそくあ

をむちうさうがまらゆめの葉まのあら

じま まめくじめのぬまとくとくら

ねこ下お葉もととひづ

梅 ころもれをこのまくまく 梅の花さき

らゆめの葉まおとくり あくまく まく

がほくとまく 万よみえようじゆゑまくら

のちよめり あくまく まく がめくら

日めのわきと 在 万十七吉あよのト柳う梅

うれともよしこれぬけのりとひすみ 繁喜

せよと大腹紫梅よ高とひ柳う梅乃れもと

をうめとくれとよあむとまく代をすき

とみの時梅より

梅氣多へ山家 疾不見と まこと

望太玉幼學抄

卷之三

望たまひ 动掌あわせ  
そももくらへ 游民さうとまをまうて称すと  
せぬといづり 美のまとよきを覺ゆるの川から  
柳ともひと魚見 游民 万九千百もじ外と  
よりを経て まわらわら柳は日暮  
宿民よ柳り うとかまくらのまつにまます  
かひともりよひいそいろよもやを  
松とももとくがまめうつま云霞  
われも峰柳とうあまく後よじくせ  
丸 ちむも 事方 と常方 わく し白  
きらう。ゆ ひと さくら ひと ち  
ゆととくとそれ柳 通 柳 うけ  
こちの ちめ まち うけ え云 か  
ましま せ う  
玉柳り ひろ 紫 ふ いわ いわ  
玉柳よく ひまき う柳花 かね雅樂 うせ  
柳 あわや あわや あわや あわや あわや  
もひいはと あわと まわ まわ まわ  
まきの まきの まきの まきの まきの  
柳 ひ肩 柳の京 以煙 あゆふとよ  
ひるひる ひるひる ひるひる ひるひる  
まきの まきの まきの まきの

被 挑

君はとせの主母推<sub>シテ</sub>妻<sub>シテ</sub>方

万葉集

卷之三

少すりがれとおもひ  
おのれの身をあらわす  
字毛と是都云乃あはれ毛被字とあはれ毛毛とあはれ毛

天平八年丙午年夏萬歲城主始築樓閣之時也  
蓋其事在今之紀元一千四百五十年之後也  
日月既已乎焉可謂之久遠也

あはれ、萬葉の如きが

柳の枝の葉の下に  
風の音が聞こえ

おひや望一和月しのまくら

五 江か葉浦源門石根娘海瀬

62  
卷之三

万松相乃子とくらり  
ゆくわ

いわくちをねど要所に處すよもるはまの緒之北志

（小字）  
わがの松城おひめのと  
わがの松城おひめのと  
すまもと

上東道若論  
修學大補充

まつてひき松を百六十手すくもあつた  
おもぬもろみと、めうとくじがん  
あめとくじの生えくまから、そともくとくと  
もうちぬくまへねをくくすうといつり  
松まきをまき、まくらのまくらをまくら  
まくら本よもわくまとまくらせ  
松まくら、まくらはくらに松まくらのまくら  
まくらのまくらをまくら、まくらまくら  
まくらやまくられ方、わくらまくらいぢ  
もくらを樹うき、かくふかくらをまくら  
松まくらのまくらをまくら

志士之氣也。久本  
之云也。

柱  
万より多く米うばくとみり月のうち  
在相

橘  
日本紀山川之名あめりカムコアホク

小七  
細凍大麥也

うら 多  
はま

卷之三

柳　さくらの葉　うめ

卷之三

卷之三

林  
紅葉山  
之  
遊  
記

國朝之制，凡有司之長，皆以書記爲副，故其事多委焉。今之主事者，不以書記爲副，則事多委焉。

いきなまよめのくく  
くくせんとお

中川はよきがことう事へひきだつて、

しゆわまくらへるまのじよすれども

乃ちりよしの御  
おとこ

素  
之  
之  
之  
之

楊志

あらわしのうえにのせよ

あわせま  
あわせまちよこさり

朱あづまは奈  
井井

下  
か  
れ  
て  
あ  
ま  
い

桃のうらも 桃のうちも とくにうらみのうら  
桃のうらも 桃のうちも ときもうらみのうら

船は弓引ひきうつてとまひ  
ちゆせうへてもむく

桺

安不智 ゆちく 鮎はら枝はるく

あじいぢ

黄楊

柳

は葉のれ

山毛竹をく

櫻

梔

あさくはし

高生

梔

かくまゆの

木云ゆよいぢ

桺子

梔

くらかわの

木雲ゆよいぢ

ばが

梔

極 极 枝

木雲ゆよいぢ

桺

梔

木雲ゆよいぢ

かく

梔

木ち

木えく

弓枝

梔

至在絶怨名 いぢへ よの木也

木る枝 千

百

梔

一枝 おえ あらとひやくえくえと、 万ふよ

弓

梔

とひ梅の つえ とより 木海民よ梅を

志

梔

えくえく おもく とより 木海民よ梅を

多

梔

木枝からと是枝と云一枚うち

あ

梔

木枝下くさや 万がつきねをかくとみどり

木

梔

木つえくとひ 月のす

弓

梔

木えくとひ 月のす

桺

梔

木えくとひ 月のす

木えくとひ 月のす



ちの事　万山にさめまきとしらとまし  
故機雲のよきひくあくらえどり。　晴天よだ  
赤くはるといぢるがくじゆくす  
鷹の松ハクももくうこもせしももくうす  
と月夜也弱ハセよき梅也とくうものやくうす  
をかくうと　深浅ハシナよきわいねとえりのと  
えくを木也　万十七ハチナナもなぎれらうともうれ  
竹室川原  
いち　万九ハシナくよかくとくら  
いたをあくともきくもくと  
見えき年ハサカの枝ハシいからくさのうへよわをうち  
を梅也梅ハシとくらはくとくらせもうもを深淺  
郭ハシ山ハシ數ハシ二千ハシもくもくとくらふ  
うのいこまよるハシ　万十九ハシナナ  
依頼ハシ見ハシくら  
名ハシくらひがくハシ　万いやく画ハシくらきくハシくら  
極ハシやくらせ　万二月ハシニよくらくもくくハシくら  
是郭ハシとくらとくらくハシくらといては万三ハシミ  
のころよ一わらと力ハシてらうちハシを郭ハシせきく  
をもくらハシくらハシとくら油ハシもまみだり又ハシ相  
もくらハシくらハシとくらハシとくら油ハシもまみだり又ハシ相  
えもくらハシくらハシとくらハシとくらハシとくら油ハシもまみだり又ハシ相

もとよりのを郭とわこゆくもりてぬ年夏  
あらうせんとまへなりと 三方湖とおどりや  
山のそよが風又あらちの秋よゆくのりうち  
三方をとむるにふくらむるにさくらうく  
鳥 音  
もとひとまくらをならすらひの風情もみるを  
八井柳乃まよ風く時とよのまち遠  
二月よもやうらうらり ほもくらめよがもううう也  
見方繁 方よげまよぐま えきいひとい  
金ちん羽 音 海をとみわううれし山風を  
こゆのうとよめの風とよもあうと わざあ  
えくゆうかきと云 万さうくもくぬ  
ちりくうりがり 方よきのものうの波と強  
勁ふ字よ九月とわう九月もかくらひのうきとひ  
波風 音 丸うきの波と種哉うじわうじの波  
きしまはくとかまくまうらんうとい魚うじのう  
スタ えくまんよくあまうくよくもほれれうら  
あくちうを寄 音 けくとねわを わまくと  
かりよも 有物也只居と云よみうとわうと  
ともねうとくもじゆうと すわうとひうと  
村えうきまくわらもやととあらうかくと  
そくへりせまんに かり まくめ やくゑを  
こもれくとくもれぬれ波と云 えうと不取れ邊

五十九圖曉鳴

鵠

卷一百一十五

類編

騰流鶴燭然

嘵爾之毛特哭

己亥和豆希可

しむしの後日、  
わらえどもみに初之。  
とくとくアラガヒテ  
セ  
カ  
ラ  
サ

卷之三

あ鶴 ネズムをもつてのびすり又滅ぼすとくくく  
原文 ひせ かわらめくらまへくらまへくらまへ  
四 火船

重慶　もろいよわら　のもじのとくとく

千々 河海よりしづかとすれど而天平又年正月  
松門裏をすまひる 河海よりしづかとすれど而天平又年正月

中よりとどかずらむかんとく爲めことなり

禁中へうとう御免（せじし）をうけまことに

うるわしく夕涼みをよみ  
まゆの上に秋色のひかるる立鶴

宿  
の  
い  
る  
所  
の  
事  
乃  
ち  
く  
ら  
ま  
う

方十一キトリノカタニアリ。是モ一ノトコトニテ、

まくらをもつてゐる。わざとしょくべあくび

方有りまじむに、アシヤウモリ、モコモノ

よわくあらぬやうもんこも無事やうりのよ

乃きこゆる。かきる。とふ。

鶴

ゆけをどり外本綱を後よ後也。達だまち。万

八あらわり。ぐく。家。保物ねば

うきろ

ひけのくまざれかくられわとひ。がま

もをかくしゆもをかく開くくものまのま

よ和わきぬとわともせくのゆせ。わきいふも。おは

太わね縁かゆよう。ゆりをものゆひひむ

ゆりをもととむとしゆ

鶯

はそくうちめちくわくろうとすむし  
からり乃りもくくるとよくをすすむかくらり

よがらく来る技やま事あ之る候。みゆせ。かくひ

雀

もくもくめひうといつを夕乃。くくわ

鳥。きうともをりめ。あくに。もと。こくし

鶲

わき。無月れ。やま。二。むき。縮翁法。鷗。の聖

鶲

ひくちゆよく。よくといふ

鶲

よく。乃もじなと云。うるわ。りの山ハ。経をと

鶲

あらぬ。わく。り。御。く。き。の。も。の。ま。く。と。

かくす角り りぬうち のうもうひも解せ  
じたるを やくへきともやむうち ほまぐら  
おれと見てもりと云 くちとくちの西 こひとく  
ちふよしきもめり

山鶴  
すゑ乃もつまむもや  
ひりめくまみあ山乃をく魚へくめくと  
むきのさわ下りて  
万葉集  
よほまのひとかお經

鷺もすすりとすずり、あらわに河原  
乃とがきくまのよひあそぶがく  
まつね機マツネキ、かくのじくに七月ナシ  
をぬけふるをとすまくまくらをもと  
被よもにわくと

見ゆるは海也 みゆ井河いとく

鷗  
えり井  
わらえ乃  
う  
鴉  
わくと  
しと  
かきそり  
みりそ  
方  
水世  
海毛石  
松山  
かき乃  
いのり  
山

万八百石を貰ひて之の三月を去る。山と川の  
せぬるこのうへとまわらと云ふ事ア  
御木の山と云ふ事と云ふ。

弘乃がもよゆく

おもむきのまゝに見え  
せうへんのまゝに見え  
せうへんのまゝに見え

舊傳之言也。故人主與其臣下，非  
一朝一夕之私恩也。

もひうれ之面もうく云ふ事ありや  
物事のまゝ  
委ね わちしき 依<sup>サ</sup>  
みし しきともれいぬ事とお わちしき  
秋沙 山も木も見るわきに見ゆる

あまきにわく  
あむとくもよ下たま

城主 おまくらあらそひをす  
久世

九月  
かくゆくを鳴とまひひく人からくせ  
わこのま  
むひとうく

よちやくと  
ひ花画遊

おまへひとひき

ある物がちと

巫志如歌引之以作通雅之約於此

志もれいとゆきねると申す人御之言  
一也

御勞も 古百鳥 普通はもと百舌もとおもとう

舌百鳥 普通

七

まくらうまく すこしめぐらえなどよがく  
ひとかわいこもりうなづむらひよがくすくらふ  
ねをぬよそくさくせき郭ふくらふとせじと  
うをはせまくらふ

卷之二

いふにせよと云はば

北後川 大和物語云之を多き  
事也。其事也。其事也。

おとづれあひぬ。古今のりわせうつみ

あはれを知らぬ者よがましめよとひの筆  
もむきぬどりぞうじゆかく

「世」  
ソシテテモハナヒリ入セシモノニ  
日如近よ

おもむきをうなぐ  
又はさすがに筆の運びは良し

奴事ぬえもとゆれりも云々

まくらのといづるひのとを悉すじてりま  
きもとわくわからぬといづる 漆成物

世說新語

慶をまく秋の葉來たりゆきの日

卷之三

かくのとくをもつて居たる所へとぞゆくえ  
ナリ

ひきくらむとおもひて  
又あがめゆ

せう  
おれわさむれと處へまくらせうも

といひ乍ら心腹を沙汰  
おこさうひるが

ひきもくとおもての内は入らじよ

卷之三

卷之三

之子也。其子曰仲孫閱，字子閱，齊景公之子也。

卷之三

まちあさかうめくわくわ  
赤 吉永の世  
白 吉永の世  
金世

わふわふふの筆

うるをかまひしのむらのむら

蒙古文書

すらりとまくらをかぶる。頭の上に手をあてて、

まゆハねのへまくらをくわうとあを

道之風也。故其後者多失之於急躁，而其先者多失之於緩慢。

馬世 馬よハ馬世  
うせ  
大馬世

あ風きぐもかなへてかと  
方よりきのひま乃  
うくじよめぢり

清ら細き柳の枝をうきあひかへりわぢや  
一告

はまくらまわする るの便わよひとく  
あせ

牛 まとの乃、ノ、を牛

牛の車を  
二車の

淮南王  
物作天  
吹るし

万のねうめとくらみ  
捨苗  
見うち今まの  
記

猿あら満こそうこくの内

之書亦一言也。此其所以爲之也。

東方天官之日也歲星於後之不見曰秋氣之云

うそれどもあはれ也凡てしのびの後へかの不<sup>レ</sup>

ひきのわゆとくわよみくらへうう

とくに御用をうけたり

虎  
アシカのへきがさう、あくびぬく一也

卷之三





惣織 そぞうの織といひ

鶴  
むやみうきのまよひりこ

之二  
卷之三

高  
之  
一  
也  
一  
之  
也  
也

おめでとう

七  
也

不云入處もすゞ御子の如き也ひて 店子曰體多は松室也  
成英疏納盡もすゞとぞくわくもくえり非主徳也非く松室  
美川上

わざとスレのこしまさと

貝 桃紅 櫻玉金 わよがすくわ

かくのうへんをいふにあつた

卷之三

伊佐美  
方十七つ三月の日未の  
夕とひづり小豆うら  
せむれ  
太田也  
高吉

贈廣扶  
贈狡扶 乞赤扶 乞赤扶 紅色也  
人也赤扶 人也赤扶

五魚牧や  
わくら 鮎名  
うう一風のすきける物也

海王之子曰少昊，其神功臣后，每岁之春，必游于冀州之北。故冀州之名，盖取之于少昊也。

劍

四

卷之三

2

卷之三

三

船のうわも まよめぬれ まくらへぬふ  
さき昔 まつうのわら

御切空氣底好く約定さうくめはと云今のわ瀬也  
水魚シメ十月以テ來死マモリうちもりあら 五日之見

鵠

やつちのまよ  
豊玉姫のすりすり金きら  
くらうとうせ

卷之三

わらわとしもとのへ  
ゆきひのくま わくわ  
わくわく

卷之三

卷之三

卷之三

四

卷之三

色め之  
日中絶に難を今  
萬葉抄より  
人猶紅  
あとも人とのんじぬハナムツ  
は撫する事成るをり也よトシ  
世一

卷之三

132

卷之三

三

此中人語云：不足為外人道也。既出，得其船，便扶向路，不復記所經。





名處う蝶  
愛在  
かの人のいも  
桜のはま  
木のよ

卷之三

二十一

卷之三

卷之二

卷之三

卷之三

柳みどりまくらひといふりを支姫。すせ自作代  
男女の恋事也。女はわざとぞのうへ。身のま  
乃もまくら。よむく乃もまくらなどといづ  
ほまきも男女せばつてめり

男女也

紅葉山房集卷之二  
丁未年夏月  
仲尼曰：直不外也。  
世子

とくに  
御用の事は  
御内閣總理大臣の事  
な

まことにまほよもよ

あらわしのれども、りやう人を取  
あらまではまとりえ。後<sup>告</sup>はく後<sup>ば</sup>も地<sup>じ</sup>を理<sup>る</sup>  
莫

まよひのうみのくわい抄

男賤男賤乃至之處未是二級也

少  
年  
と  
一  
方  
も  
う

かへる  
春よ  
さくらのまつり

かくのうへ  
かくのうへ

よしのとひかく

あ一米こわや乃うみけ

いや生れのうと見たりと物の思ひこ

松風すとせきをふくらましにあらざよ

やくいふやみてこそもよみよみ

妻妻やうりきをもくまぬへりふみとさう

うきひのこりといひてのゆのゆいこうじ

夫夫ととせうきうち草木よ入く脚二年川

ううねくらと火井火井とう

兄弟兄弟わらねづるえく

えいととくもくくはく

いきをとく

父母父母あらうちたうらみ母母うそりうゑしゑ

かくにんきくにんあらうらねうゑ

もととお後松抄

乳母乳母おおねねめくらうらぬり

ひうらのとくふ像抄像父父見うりこ

もくらうりうとううり

うくらうりうとううり

うくらうりうとううり

うくらうりうとううり

うくらうりうとううり

うくらうりうとううり

うくらうりうとううり

うくらうりうとううり

ちうのひかわの後もとをみりて

西行 湖底の底わらすすきのあらわのあ

橋見えれ

山すりぬくさ開

聖鷦

時

のまき

おまけぬき

乃ちまめ

せきのあらわす

おまけぬき

乃ちまめ

せきのあらわす

みわく死むのまく

人津船

人船

せきのあらわす

心人うれしき

人船

思かくおまひ

人船

めうごのま風の意うらり

人船

ぬうぬうめうめうすく秋入るにゆうむひ

人船

毛用うせ 美ら地のあのうれう

人船

金すまうといまうと あまうこもうと

人船

月ひきうちをつる初

人船

暮すひかりひどきわらうくわね

人船

まゆる おひと ぬくひひと て

まれ ゆき

ぬしを そしと まくひくらも

花をもとと おひだり

お

わうひと おひと おひと

もひくわうひ

芳いを

興利

おひのくと おひのくと

おひのくと おひのくと

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

と

と

と

と

と

と

と

と

精

せ

わき

さく

と

</div

物 がきか

のまくらひあれ 右 あか

のまくらひ ぬ

のまくらひ に

物 いまくらひ ぬ

のまくらひ おれ

のまくらひ に

はな すまのまくらひ 新 じれんか に

のまくらひ おれ

のまくらひ に

はな すまのまくらひ おれ

のまくらひ おれ

のまくらひ に

はな すまのまくらひ おれ

のまくらひ おれ

のまくらひ に

病 あらわすまくらひ おれ

のまくらひ おれ

のまくらひ に

無才 あらわすまくらひ

のまくらひ おれ

のまくらひ に

物 あらわすまくらひ おれ

のまくらひ おれ

のまくらひ に

山 あらわすまくらひ おれ

のまくらひ おれ

のまくらひ に

ゆき あらわすまくらひ おれ

のまくらひ おれ

のまくらひ に

呪唱 あらわすまくらひ おれ

のまくらひ おれ

のまくらひ に

緩 あらわすまくらひ おれ

のまくらひ おれ

のまくらひ に

心 あらわすまくらひ おれ

のまくらひ おれ

のまくらひ に

眾 わまつ罷 くにほひ見 実地 いわひ跡 逸見  
人氣 人氣 ちうへき うて地 不足氣

うこく後期

後期

白

卷之三

三

血

ぬりと云

ぬらせ

のら

脳

すつじえ

老 ないひ 痢 そひ 老 そく 老 そよ

猪 ふきあ きくろそ 一猪

猪食部

せきのを食くまゆ

蟹翼衣

衣 わまほそ

えもひうるわのぐそ

もとさき けつま

毛 さよ うまと

おこ

ひく

衣 わゑさら

支

雲霞

かくし

大のあら

かくしのひめよふさうとあこ基後房アロトトマ

善事 そよ

ちれのうわ みづき 濡衣 あこ

もとひ

ちもどり

後利基後房アロトモドリ

もどりかこ

もあ

あ

ぬき そくめ わよ

おやく

あ

れ

ぬ

を 万 せき

萬

山 そよ

けやひけ

くま

きよく かく 万

かく

そよ

波 お

うゆ

そそつきせきの

波

うゆ

わく

うゆ

ふきくへ 七の おきと

い

波 うゆ

そく

うゆ

まくひく あ トの がもの ひ

う

を か か

か か

か か

こくめ おを ときわ さ ぬお うと うめ お

お

お

お

お

西  
万林村とちを万班をとくら  
シムリニテリトクムラ  
万林村のからひのひやけのふろわき  
すこしめ傍み廢あまん万  
シムリニテリトクムラ  
みことの見くすと毛り件のこきとひ風ひ  
くすとくらまくらとむいづり  
れくへとくしゆかんめせまねとくもく  
きしむきれ乃林とくのれをくくくくく  
也原のうもにほじ上あづのゆき  
ルトクムラ六位アツトクムラ  
もさよぬひのほく乃林アツトクムラ  
がくくえをくくと鷺林アツトクムラ  
もくくもくと  
万林村の林をほくはくもく  
もくくもくとくらむく  
万林村の林をほくはくもく  
もくくもくとくらむく



ぬをやめ、とのまみ、てきもの、ぬくめ、刀くわろ  
 わきひく、えひきのじく、をくもと  
 綿、えくぬひのじく、をくもと  
 布、えくぬひわきくもとが、陸奥後村元もくもとが  
 いづり、えくぬひのじく、をくもと、陸奥  
 さうじそじくもと月、てと、あり、さうじ  
 総、あまの余いあら月、年、わくと、あまの月と  
 いつ、みゑ、うと、うりを、みえ  
 酒、じくもと、とよみくさ、あひ跡くす、  
 へせ、柏梨、うえす、あひくさ、くらきとくす、  
 りきひのじくもと  
 ひくもと、とよみくさ、あひ跡くす、  
 うえす、あひくさ、くらきとくす、  
 飯、かずゐ、ひくもと、あよわれ、あん  
 きのつひとよまれ、ひあわき、ハ椎乃くすり  
 菓子、えきひこ、萬みるを、こと  
 かくの見、えくもと、お茶、無に茶  
 素、れいもと、あがもの、素、不孝不孝、くきむかの、  
 金、金、よもとくすり、いく、あがむ、  
 亂、あがめ、信郎金丸、ゆるみ、のり、め、いも  
 うこうから、うくめり、と、かのうと、朴うな  
 のくみ、ぬ、いづれ







寝不 可禁シテハナヨヌキニモセモ此和事シテニ及人也

トトアラミニ一ノ事シテトタマリ

古

れ あまく人シテ、 あまく人シテと うれしれよと  
あと一候シテ後シテ成幼海シテ之先シテ列不承矣  
よめシテおもむきを さよ 席シテもと 酒シテ派  
いそ。 カリ いも うそ つ差シテ酒シテ加賀屋室  
櫛シテうれ こり うそ うそ うそ うそ うそ  
万一 あまく人シテよく うそ うそ うそ うそ うそ

こもと人シテ おの ぬ うそ まれを山野驛シテ  
の うわくと すり ひゆう うそ うそ うそ うそ うそ

人シテ あまく人シテよく うそ うそ うそ うそ うそ

かと人シテ うそ うそ うそ うそ うそ うそ うそ

えのよめシテ あまく人シテよく うそ うそ うそ うそ うそ

便シテ いそ

見シテ

こもと人シテ おもむきを小屋シテ お代シテ相シテる

棟シテ三九下シテ 二九下シテ 二九下シテ 二九下シテ

の うそ うそ うそ うそ

七言

冠シテ おもむきを

背シテ おもむきを

あくのうふ おもむきを

わくのうふ おもむきを

おもむきを

鍼シテ あらはり おもむきを

おもむきを

乃めのれ  
かみのとせ

やまつり乃

奴

はなれ  
ぬよ  
五

まうりや  
やこみ

の

トモ  
ま難ナチキ  
先在地

上

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

わめのとせのめり

上

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

刀

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

魚簀

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

杖

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

杖

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

杖

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

杖

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

杖

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

杖

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

杖

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

杖

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

木

火

水

木

杖

ひよけの木

日

月

火

水

木

火

水

わがまゝのこのやせをま  
まわうひことおも

鉛針 ゆのへ 来ら新あたらし  
太字  
うらわ

うきら  
うめり

卷之三

入る。ノ。和。の。の。の。の。  
この。み。く。れ。三。石。

ゆるわらはまくいはれを人縁の方へいそがわらえ

日の多いお休日は  
もよほゆる  
たまゆら

縛  
あらまし、  
おもひそく  
しめし  
うそ

らひをあわせ  
わざとくわく  
天照大神のなむひ

七子

高麗  
金  
十  
一  
德  
十  
白  
銅

ひさごの。計後也。ひめます。海とくらへ渡  
あぢゆの。アヤセ。カミハラキ。アタシ。アタシ。

卷之三

よしむらのとく一清浦  
おもてのこ

之風子  
任譜  
真稿  
五  
川  
之  
風

出でばまく 俊群行賄別振  
只様も優く うそがよきと聲のよきとあ

舞 わふ もれ

棹 あひく舟 雄本造とて水棹也

はく人 は汲郎也 玉辭  
舞みあらむとしゆら

翫壁 いのと あらわめの月 朧月と云ふ 未諭  
第 てあまをと 月浦也 おとひひ およ見 楠風

山みのとくを うきくら琴 懲士絃ハ陶潛琴也

うほのとくにて お琴也 おとひひ およ見 楠風

和琴 わのまと きわめのとく 金よりれ、と

さかとくありせ 万葉もとまもく紀くちやく  
琴取

きくくそとくのきくひよ姉やうすくもくもく  
孟毛

あま乃と ひくすまと ひくすまと ひくすまと  
小琴

草 わばくじめ 曲也 姨えくをとくは筆すと  
うこくらく胡作也 除虫秋よりくらぬ虫のよ

こゑ様くがくひく 井也 へ小琴

草 むく草也 木也 木也 木也 木也 木也 木也  
ちくせうのとくの絲あくりと  
ちくせうのとくの絲あくりと

彼 いもわる いもわる 万叶うりう  
幣 カとくも うのとくも ぬき ぬしき

卷之三下

四  
卷

金批三下

大富  
之後世

後文承  
九

即  
世  
切  
いを  
走  
はき

壁  
ちまひら かくは  
一木也  
せん  
木也

旅多喜也。其後  
家事。其後

生  
あ  
ま  
れ  
か  
わ  
り  
え  
む  
く

也山望海通  
夏侯  
南流

夢中見一老翁，身着青衣，腰束白帶，頭戴方巾，手執拂子，徐步而來。問之，乃知是太白也。

そのめぐらひに也  
云  
万葉  
五葉  
万葉

事方ノ如海方  
先也。西游物語  
主をもつてゆきゆく  
水

日 晴  
秋葉本草  
後孫一  
ねえや山茶も  
やうりうちを  
陰茂寺のまき

柳之下御苑石鵝

紅葉丸 いま度  
シテリセリ  
あらわゆる  
あへ うきりもつ

春赤橘花空下紅

縁  
か  
わきまつ  
かかとつね縁よわく

朱  
紫  
真朱

いが わき うちも  
きくま あそぶがほいを

已下之  
一發同人集

冥途  
之山  
世平  
世平

年上に相手のことをよく思ふのであるが、食い

卷之二

帝王

御不九全百穀城  
又百察也如云計

大内山おおうちやま

卷之三

院  
朝  
卷  
之  
後  
編

胡蘆  
七世

ひきこもる 延久

久

院とすからうどく云 ほ民よきやまのかへと  
御不 ももや乃山 山ふみくわまくもれ忍洞とよ

海賊アラ 溪行以本 すきのうと 併勢以本

法皇アラ 千載序曰 のりとをもとづる  
まうえ ちろめえ わがまえ たとのえ  
ぬきをひや

女文アラ のくわ 群行以本 すきのうと 併勢以本

いじきのう イモミ  
女院 いじきのう わりとゆの 女おこし虎名とがま

后 いじきのうのま あきとあきのや

じゆ中えとねのまとゆの相派安人ヒト ま

木義

木村旗佐ヒタチサ まおはわうのまとゆの木とくの木

國

室母アラ とくお

御萬年年號ヒヤウニンノシメイ ひきの政體公庫ヒキノヒツコク ひりとく

親王 桜きよひのまテのこ てのまといつとく秀触院ヒツクイニ すゑま

てわう ぬとひり かわせアラ 鳥アラ

乃と 桜乃花 こ乃花 まよひり。

皇アラ のアヌの乃と

万葉よす處ヒマツ まどり まもととく

桃柄

大臣 ときひく けい乃階

見くみふのむ

金とく

云卿アラ おとめの通

家相アラ まめのほく は拾遺本

家相

家相アラ まめのほく は拾遺本

三位 三日をもぐる まひの位

定位 志昇シテスル しもとひの種シモトヒノヒメ て位已シテシテ とす

又位 わきのあもウキノアモ うりあもウリアモ

六位 乃とりひそてナトリヒソテ わびあそぶ

迎來大わヨウライタガ すま山スマヤ やうわ門ヤウワモン

近來カミセ うらきを理用リヨウ はねぬをせうりや大わタガ とく

未ミ まつりをとくらマツリコトクラ 乃ハ 勇力ヨウリ といづら毛マフ 人ヒト

御事ウヂ まつと行マツトヨ と

中少將チホウジョウ 言ハシマ 大太オオタ おのめの

石イシ 太オオ の 乃ハ 組ツヅク せり おれオレ わのこワノコ

行ハシマ まつとひ

約後エツゴ そり かくカク まつとひ

胡ヌイ わそワソ 万マニ へうりの力カモカツ みのりミノリ

左サ あがれアガレ まつとひ

百ヒヂ おほひオホヒ まつとひ

りよひリヨヒ くさクサ 民ミン

使シテ ひひきヒヒキ まむれマムレ

主シテ 敵ヒツジ まもろマモロ とく

隼人スズメヒト ひなたヒナタ ひなたヒナタ



えれかひのめの刀をあら

いきるのうせおよいくるみのなま

わじきひの御おとせ

まくはり海うみのまくらをも

ひくとさゆーの神

雄略おろくの財長ざいちやう

ア いあこひめ

させ さめくとのめを出だす人ひと也や又またまわまわ  
え まくと地じのまくとまくをもものをれれととふ  
まくはりつまう

まくはりの船ふね も御ご えふく

千磐破せ

ア いあこひめ

させ さめくとのめを出だす人ひと也や又またまわまわ  
え まくと地じのまくとまくをもものをれれととふ  
まくはりつまう

豈乃少子口那也  
あゝこゝ人中う

遠道

雲霞五色也  
うのなまくは

被ふるに神主も方處  
下さういこまち

アミテモ神也  
アミテモ神也

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

統

三聲世

三聲世

三聲世

阿波國文庫

ゆきひとこまや わま月を 金霞に  
あくさるむめ あめりそこのりを

仙人乃能せんじんののう 山人さんじん ちくわ山  
そのその おれくほらふ おもろまくせ おきま仙

翁おきな しのひくま

翁おきな せりふ

判

おきな

阿波國文庫

114  
5  
4  
3  
1  
4



110X  
151  
7